

契 約 書

広島県公立大学法人を甲とし、〇〇〇〇株式会社を乙として、甲と乙は、乾式複写機（以下「複写機」という。）の賃貸借、保守および消耗品の供給について、次のとおり契約を締結した。

（目的）

第1条 乙は、その所有する複写機を甲に賃貸し、複写機を常時適切かつ正常な状態で稼働できるようその保守を行うとともに、複写に必要な消耗品を供給することを約し、甲は、これに対して料金を支払うことを約した。

（契約期間）

第2条 この契約の期間は、令和8年12月9日から令和14年3月31日までとする。

2 前項の規定にかかわらず、令和9年度以降において、当該複写機の賃借料の支払に係る甲の歳入歳出予算の金額について減額又は削除があった場合は、甲は契約を解除することができるものとする。

（機種及び設置場所）

第3条 機種及び設置場所は、下記のとおりとする。

分 類	機 種	台 数	設 置 場 所 等
低速機		3台	別紙仕様書のとおり
中速機		5台	
カラー高速機		3台	

（料金単価）

第4条 料金単価は、複写機の種類に応じて、次のとおりとする。

（消費税及び地方消費税込み）

分類		モノクロ複写 片面1枚当たり	カラー複写 片面1枚当たり	備考
モノクロ	低機機	円	—	
モノクロ	中速機	円	—	
		円	—	
モノクロ・カラー 併用機	高速機	円	円	
		円	円	

（複写料金の請求）

第5条 乙は、甲とともに毎月末日に機械記録計により検認した正常な出力枚数に、別紙複写料金の料金区分ごとに乗じて算出した額（当該算出額1円未満の端数があるときは、その端数を切り捨てる。）を複写料金として甲に請求するものとする。

2 複写機の使用に際して、乙の責めに帰すべき不良複写枚数及び複写機の点検調整のために使用した複写枚数は、前項複写料金の対象としないものとする。

（料金の支払）

第6条 甲は、乙から適法な請求書を受領した日から30日以内に料金を支払うものとする。

2 甲は、前項の支払期限までに乙に料金を支払わないときは、甲は、乙に支払期限到来の日の翌日から支払をする日までの遅延日数1日に応じて、未払の料金につき年3.0パーセント（算定対象の期間において適用される政府契約の支払遅延防止等に関する法律（昭和24年法律第256号）第8条第1項の規定によって財務大臣が決定した率（以下「支払遅延防止法の率」という。）がこの率と異なる場合は、支払遅延防止法の率）の割合で算定した額の遅延利息を支払うものとする。

（契約保証金）

第7条 甲は、乙に対して契約保証金の納付を免除する。

（複写機の保守）

第8条 乙は、複写機を常に良好な状態で使用できるようその保守を行わなければならない。

2 乙は、前項の保守を行うため、必要に応じて技術員を設置場所に派遣して、点検調整を行わなければならない。

3 乙は、複写機が故障した場合は、甲の請求により直ちに技術員を派遣して修理に着手し、速やかに正常な状態に回復させなければならない。

（適用除外）

第9条 乙は、次の各号の原因により複写機が故障又は損傷した場合は、第5条の複写料金のほかに複写機の保守に要する費用を甲に請求することができる。

- (1) 乙の技術員以外の者による改造、修理、分解及び加工
- (2) 乙の技術員の立会いを得ずに行われた設置場所の変更
- (3) 乙所定のもの以外の部品又は消耗品等の使用
- (4) 故意又は重大な過失による甲の責めに帰すべき事由

（消耗品の供給）

第10条 乙は、常に良質な複写の維持ができるよう複写に必要な消耗品（トナー、ドラム等）を円滑に供給しなければならない。

2 乙は、その他の消耗品等について、乙の指定する者の巡回又は甲の申出によって、予備手持量の不足を知った場合に当該消耗品等を供給する。

（消耗品の所有権）

第11条 消耗品等の所有権は、乙に属し、甲は、それらを善良なる管理者の注意義務をもって保管し、通常の用法に従って使用するものとする。

2 甲は、消耗品等が乙の所有であることを示す表示等を損傷し、又は消耗品等を他に流用してはならない。

（設置場所の変更）

第12条 甲が第3条の規定による設置場所を変更する場合は、あらかじめ乙に通知し、乙において複写機の移動を行うものとする。

（権利義務の譲渡などの禁止）

第13条 乙は、第三者にこの契約の履行を委託し、又は契約による権利を譲渡し、若しくは義務を引き受けさせてはならない。ただし、甲の承諾がある場合は、この限りでない。

（秘密の保持）

第14条 乙は、この契約の履行に関して知り得た事実を第三者に漏らしてはならない。

（損害賠償）

第15条 甲又は乙は、自己の責めに帰すべき理由により、相手方に損害を与えたときは、その損害を賠償するものとする。

（催告解除）

第16条 甲は、乙がその債務を履行しない場合において、相当の期間を定めてその履行の催告をし、その期間内に履行がないときは、この契約を解除することができる。ただし、その期間を経過したときにおける債務の不履行がこの契約及び取引上の社会通念に照らして軽微であるとき

は、この限りでない。

- 2 債務の不履行が甲の責めに帰すべき事由によるものであるときは、甲は、前項の規定による契約の解除をすることができない。
- 3 第1項の規定により契約が解除された場合においては、乙は、第2条に記載の契約期間の月数に第4条の別紙に記載の賃貸借料金の月額を掛けた額の10分の1に相当する額を違約金として甲の指定する期限までに支払わなければならない。ただし、解除の原因がこの契約及び取引上の社会通念に照らして乙の責めに帰することができない事由によるものであるときはこの限りでない。
- 4 甲は、第1項の規定による契約の解除に伴い、損害を被ったときは、前項の違約金の額を超える損害が甲に発生した場合、甲は、乙に対して、その超過額の支払を請求することができる。
- 5 甲は、本条各項の規定により本契約を解除した場合、それにより乙に損害が生じても、何ら賠償責任を負わない。

（無催告解除）

第17条 甲は、次の各号のいずれかに該当するときは、前条の催告をすることなく、直ちにこの契約の全部を解除することができる。

- (1) 債務の全部が履行不能であるとき。
 - (2) 乙がその債務の全部の履行を拒絶する意思を明確に表示したとき。
 - (3) 債務の一部の履行が不能である場合又は乙がその債務の一部の履行を拒絶する意思を明確に表示した場合において、残存する部分のみでは契約をした目的を達することができないとき。
 - (4) 契約の性質又は当事者の意思表示により、特定の日時又は一定の期間内に履行をしなければ契約をした目的を達することができない場合において、乙が履行をしないでその時期を経過したとき。
 - (5) 前各号に掲げる場合のほか、乙がその債務を履行せず、甲が前条の催告をしても契約をした目的を達するに足りる履行がなされる見込みがないことが明らかであるとき。
- 2 甲は、次の各号のいずれかに該当するときは、前条の催告をすることなく、直ちにこの契約の一部を解除することができる。

- (1) 債務の一部が履行不能であるとき。
 - (2) 乙がその債務の一部の履行を拒絶する意思を明確に表示したとき。
- 3 債務の不履行が甲の責めに帰すべき事由によるものであるときは、甲は、第1項及び第2項の規定による契約の解除をすることができない。
- 4 前条第3項から第5項までの規定は、第1項及び第2項の規定により契約を解除した場合について準用する。

第18条 甲は、次の各号のいずれかに該当するときは、催告をすることなく、この契約を解除することができる。

- (1) 乙が、私的独占の禁止及び公正取引の確保に関する法律（昭和22年法律第54号。以下「独占禁止法」という。）第49条に規定する排除措置命令（以下この号及び次項において単に「排除措置命令」という。）を受け、当該排除措置命令が確定したとき。
- (2) 乙が、独占禁止法第62条第1項に規定する納付命令（以下この号及び次項において単に「納付命令」という。）を受け、当該納付命令が確定したとき。
- (3) 乙（乙が法人の場合にあっては、その役員又は使用人を含む。）が、刑法（明治40年法律第45号）第96条の6若しくは第198条又は独占禁止法第89条第1項若しくは第95条

第1項第1号の規定による刑に処せられたとき。

2 甲は、排除措置命令又は納付命令が乙でない者に対して行われた場合であって、これらの命令において、この契約に関し乙の独占禁止法第3条又は第8条第1項第1号の規定に違反する行為があったとされ、これらの命令が確定したときは、契約を解除することができる。

3 第17条第3項から第5項までの規定は、前2項の規定により契約を解除した場合について準用する。

第19条 甲は、次の各号のいずれかに該当するときは、催告をすることなく、この契約を解除することができる。

(1) 乙の役員等(乙が個人である場合にはその者を、乙が法人である場合にはその法人の役員又はその支店若しくは営業所(常時契約を締結する事務所をいう。)を代表する者をいう。以下同じ。)が、集团的に、又は常習的に暴力的不法行為を行うおそれのある組織(以下「暴力団」という。)の関係者(以下「暴力団関係者」という。)であると認められるとき。

(2) 乙の役員等が、暴力団、暴力団関係者、暴力団関係者が経営若しくは運営に実質的に関与していると認められる法人若しくは組合等又は暴力団若しくは暴力団関係者と非難されるべき関係を有していると認められる法人若しくは組合等を利用するなどしていると認められるとき。

(3) 乙の役員等が、暴力団、暴力団関係者又は暴力団関係者が経営若しくは運営に実質的に関与していると認められる法人若しくは組合等に対して、資金等を供給し、又は便宜を供与するなど積極的に暴力団の維持運営に協力し、又は関与していると認められるとき。

(4) 前3号のほか、乙の役員等が、暴力団又は暴力団関係者と社会的に非難されるべき関係を有していると認められるとき。

(5) 乙の経営に暴力団関係者の実質的な関与があると認められるとき。

(6) 再委託契約その他の契約に当たり、その相手方が前各号のいずれかに該当することを知りながら、当該者と契約を締結したと認められるとき。

(7) 乙が、第1号から第5号までのいずれかに該当する者を再委託契約その他の契約の相手方としていた場合(前号に該当する場合を除く。)に、甲が乙に対して当該契約の解除を求め、乙がこれに従わなかったとき。

2 第17条第3項から第5項までの規定は、前項の規定により契約を解除した場合について準用する。

(暴力団等からの不当介入の排除)

第20条 乙は、契約の履行に当たり暴力団等から不当介入を受けた場合は、その旨を直ちに甲に報告するとともに、所轄の警察署に届け出なければならない。

2 乙は、前項の場合において、甲及び所轄の警察署と協力して不当介入の排除対策を講じなければならない。

3 乙は、暴力団等から不当介入による被害を受けた場合は、その旨を直ちに甲へ報告するとともに、被害届を速やかに所轄の警察署に提出しなければならない。

(損害金の予定)

第21条 甲は、第19条第1項及び第2項の規定により契約を解除することができる場合においては、契約を解除するか否かにかかわらず、第2条に記載の契約期間の月数に第4条の別紙に記載の賃貸借料金の月額を掛けた額の10分の2に相当する金額の損害金を甲が指定する期間内に支払うよう乙に請求するものとする。

2 前項の規定は、甲に生じた実際の損害額が同項に定める金額を超える場合において、甲が当該

超える金額を併せて請求することを妨げるものではない。

3 前2項の規定は、第2条に記載の契約期間が終了した後も適用されるものとする。

(貸付物件、残存消耗品の返還)

第22条 契約期間が終了したとき又は第2条第2項若しくは第17条から第20条までの規定によりこの契約が解除されたときは、甲は、貸付物件及び残存消耗品を速やかに乙に返還するものとする。この場合において、当該返還に要する費用は、乙の負担とする。

(実地調査など)

第23条 甲が、この契約に係る甲の予算執行の適正を期するため必要があると認めた場合は、甲は、乙に対し、乙における当該契約の処理の状況に関する調査への協力を要請することができる。

2 乙は、前項の要請があった場合には、特別な理由がない限り要請に応じるものとし、この契約の終了後も、終了日から5年間は、同様とする。

(疑義の解決)

第24条 この契約の履行について疑義を生じた場合又はこの契約に定めのない事項で必要がある場合は、甲及び乙が協議して定めるものとする。

(管轄)

第25条 この契約に係る訴訟の提起又は調停の申立てについては、広島地方裁判所を第一審の専属的合意管轄裁判所とする。

この契約の締結を証するため、契約書2通を作成し、甲と乙が記名・押印をして、各自その1通を所持する。

〇〇年〇〇月〇〇日

甲 広島市南区宇品東一丁目1-71

広島県公立大学法人

理事長 鈴木 典比古 印

乙 〇〇市〇〇町〇番〇号

〇〇〇〇株式会社

代表取締役 〇〇 〇〇 印